

別紙 2

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 野村崇弘

論文題目 中国の移行経済における腐敗問題—ロシアの事例との比較—

中国経済は、1980年代以降のいわゆる「改革と開放」の時期において、市場経済化と経済近代化という二重の移行過程にあり、この間急速な経済成長とともに、広汎な腐敗現象が現れている。市場経済化への移行とそれに伴う腐敗の蔓延という点では、同時代のロシアも同様であるが、経済パフォーマンスは中国のほうが優れているという差異が観察される。本論文は、この中国の移行期経済における腐敗現象と経済パフォーマンスとの関連を、政治経済学的観点から、しかもロシアの事例との比較において、検証した力作である。主として対象とされている時期は、1980年代から1990年代前半までの時期である。

筆者は、システム移行期の中国とロシアを比較する独自の枠組を作り上げ、それによって両者を比較するアプローチをとり、市場経済化とレントシーキング、中央指導者の腐敗取締、政治的・経済的分権化と地方政府の行動、国有企業改革と民営化と腐敗の関連、密輸問題など、関連する広汎な問題領域を分析した。その上で、移行経済国における腐敗の経済的機能（経済発展を阻害するかどうか）は、移行の初期条件および官僚や企業などのアクターの行動に作用する外的制約（腐敗行為の誘因と腐敗に対する政治リーダーによるコントロール）の間のバランスに依存し、中国の場合は1990年代前半まで経済発展に有利なバランスが存在し得たとの結論を得ている。その有利なバランスとは、移行の初期段階における市場や財産権の不完全度は高いが、エイジェント（特権的な党・政府官僚）を、ある程度生産的な活動に誘導するような経済構造と投資環境が存在し、同時にエイジェントが強力な既得権益層を形成して経済発展の障害となることを防ぐトップ政治エリートによる政治的コントロールが可能であるような、そういうバランスである。筆者によれば、こうしたバランスは、中国では1990年代後半からしだいに失われている。

論文は、論文本体A4版176頁（400字詰原稿用紙換算590枚）で、序章と結論を除き全5章で構成されている。文献注は本論中に埋め込まれ、その他の注は脚注として付され、本文に対して事例データ、関連文献の提示や補足的論点を示すものとなっている。また、本論の理解を助けるため8葉の図と19個の表が本論中に挿入され、巻末には文献目録が付されている。

序章では、上記の問題の提示が行われるとともに、分析枠組が提示されている。筆者は、腐敗を「公的権限及びそれへのアクセスを利用して個人や小集団の利益を追求する行為」と定義し、このような行為は、そのアクターにとっては、単なる個人的逸脱やモラルの欠如、あるいは一定の文化的要因に影響される行為ではなく、制度的制約下の合理的行為である、と捉える。その上で、腐敗の経済的効果は、資源賦存、投資環境、市場や財産権制度の状況などの初期条件を背景に、官僚・企業などの政治・経済的アクターの行動に作用する腐敗の誘因と腐敗に対するコントロールのバランスによって変化するという仮説を提起する。腐敗の誘因とは、腐敗の機会と収益性であり、コントロールとは、腐敗に対する

中央政治エリートの監視と制裁である。腐敗から得られる収益が、浪費や資本逃避でなく生産的投資に回されるようなら、腐敗が必ずしも経済成長を妨げないと言える。

筆者が採用する腐敗の広い定義においては、レントシーキング、すなわち裁量権、コネ、賄賂などを利用して市場競争を制限することで生産の機会費用を超える利益を追求する行為も腐敗に含まれる。第1章「『市場』とレントシーキング」は、中国とロシアの移行期の不完全な市場がもたらす「市場の機会」において発生するレントの構造、レントシーキングの手段、獲得されたレントの再投資用途の違いについて論じている。筆者によれば、急激な市場経済化と民営化のため天然資源や金融業に巨大なレントが生じ、エリート間で既存資源の再配分による収奪型のレントシーキングが激しく展開され、投資環境の劣悪さのため獲得されたレントが深刻な「資本流出」へ向かったロシアに対し、80年代中国の混合経済体制の下では、レントシーキングはむしろ計画部門からより競争的な市場経済部門、非国有部門への資源の移転を促し、また獲得されたレントの大部分は国内に再投資された。このような対比から、筆者は「腐敗した市場でも市場が存在しないよりはましである」との命題に同意できるとしている。

第2章「反腐敗の政治」では、不完全市場におけるレントシーキングの政治的側面、すなわち中国の鄧小平と江沢民、ロシアのエリツィンとプーチンによる腐敗の政治的コントロールの事例を検討している。筆者によれば、反腐敗の政治における最高リーダーの最優先の課題は、リーダー個人の権力基盤の維持や体制の安定であり、そのために腐敗に不満を持つ民衆をなだめるとともに、腐敗の受益者であり体制の担い手でもある幹部の支持を失わないようにしなければならないというジレンマに直面する。この点では、一応民主選挙という手続きで正統性を調達・更新できるロシアのプーチンに比して、中国共産党リーダーは総体的に大きな脆弱性を抱えているといえる。

第3章「分権化と地方政府」は、計画経済体制の改革とともに展開した分権化と地方政府（幹部や指導者）の機会主義的行動としての腐敗やレントシーキングと経済パフォーマンスとの関連を論じている。筆者によれば、政治的分権化が進む一方で財政的集権制が維持されたロシアにおいては、地方政府が中央からの補助金に頼りつつ企業を収奪の対象としたため生産的投資が制約を受けた。これに対し、政治的集権制は維持される一方財政請負制により地方財政における収支がリンクすることになった中国の地方政府は、地方開発主義と保護主義、すなわち行政機関の企業化と地域的独占の組織などを通じて経済的収益の最大化を目指した。中国の中央指導者は、腐敗が蔓延しても結果として経済発展に寄与する限りはそれを黙認してきたのであった。

第4章「企業制度改革と『民間部門』」は、財産権の基本制度と構造にかかわる改革、すなわち企業制度改革と「民間部門」の創設過程における腐敗とレントシーキングについて論じている。筆者によれば、1990年代初期のロシアでは、官僚による経済的独占を打破して民間部門を作り出すことが優先され、公有制の解体と民営化が急激な形で行われたのに対し、中国では、公有制の外部に企業を発展させ、市場競争を促進する形をとった。国有企業については、国家による生産手段の支配自体は変更せず、その企業資産を利用して利益を得る機会を与えた。これは、一種の国有企業経営の分権化であり、経営者に資金フローを増やすインセンティブを与えると同時に、中央のコントロールの維持もしやすい改革であった。このため、中国では上からのコントロールのもとに国家内部における権限と

資産の再配置を通じて官僚の「資本家」への転身が進行したが、ロシアでは、国家から民間部門に安価に大量の資産が移転され、国家は弱体化して「マフィア支配体制」あるいは「強盗資本主義」と称されるような奇形的な政治経済システムが形成された。

第5章「中国の特色ある腐敗：密輸」では、1980年代以降急増した消費財、さらには生産財の密輸入と98年以降強化されたその取締が分析されている。筆者によれば、ロシアにおいては、急速な貿易統制の撤廃により、国内生産を保護しない形で輸入により消費財不足の解消が行われているため、中国とパラレルな状況が現出していない。中国では、経済体制改革の進展が漸進的であって、商品の内外格差とそれを規制する官僚の特権が温存される状況が長く続いているため、市場化、分権化、国有企業改革の矛盾が集約的に表現されたレントシーキングとして密輸が続いている。密輸は、この意味で「中国の特色ある腐敗」である。密輸は、保護政策によって国内企業が得ているレントを非法な手段によって密輸業者および彼らと癒着している官僚に移転するレントシーキング行為であり、その収益性は、国内需要の状況を背景に、商品の内外格差と腐敗の程度に応じて増加し、摘発や処罰のリスクによって制約をうけるものである。密輸取締は、奪われたレントを奪還しようとする政府側の行為であるが、不完全な市場がもたらす誘因と機会を取り除かなければ解決しない。

最終章は「結論」である。まず、各章での議論が、筆者が提起する仮説の3要素、すなわち(1)初期条件、(2)アクターの誘因、(3)コントロール、に沿う形で総括され、冒頭に紹介した結論と展望が確認されている。

以上が本論文の概要であるが、本論文の最大のメリットは、中国の移行経済における腐敗問題について、①独自の分析枠組を形成して、②腐敗と経済パフォーマンスとの関連という焦点をはずすことなく、③ロシアとの比較において、④関連する広汎な問題領域に対して統一的な分析を試みたという点に求められよう。換言すれば、筆者は、「腐敗」をキーワードにして、従来バラバラに扱われてきた経済の市場化、地方政府と地方企業の関係、国有企業改革、密輸などの個別トピックを統一的な枠組のもとに位置づけてクリアな線で結びつけ、移行期中国の政治経済的特質を浮き彫りにしているのである。

こうした分析のために、筆者は公開情報や二次文献の膨大なデータから事例を集め、それらを適切に自分の議論に当てはめて論述を展開している。また、中国の特色を浮きだたせるために、ロシアの事例についての研究を進め、中国の事例と対比できるところまで進んだこと、そして、結果として、腐敗問題の分析を通じて移行期中国の政治・経済システムの性格を、明確な輪郭で描くことに成功していることは、高く評価できる。開発途上国や旧社会主義国の経済移行期の腐敗を扱った研究は少なくはないが、経済パフォーマンスとの関係をここまで体系的に分析したものは少ない。中口の腐敗現象を比較した論著も、数が少ないだけでなく、本論文ほど広汎な問題領域をカバーしたものは存在しない。その意味でも、本論文は現代中国政治研究に新たな貢献をなす成果であると評価できる。

本論文は、基本的には現代中国を対象とする地域研究であるが、前述のように、制度的制約の下でのアクターの合理的選択という基本的にミクロな観点から出発させる独自の分析枠組を形成して、腐敗の原因や様態を結局は研究対象社会の特殊性に帰する文化論ないし歴史論的還元論の陥穽を回避して比較分析を可能とし、そして実際にロシアとの比較を広範な問題領域において展開しきったことは、地域研究と比較政治学の理論との調和を高

いレベルで達成したものであり、この点の意義も小さくないとすることができる。

ただ、本論文にも問題点はある。第一は、分析枠組の問題である。前述のように、筆者は、制度的制約の下でのアクターの合理的選択というミクロな観点から、腐敗と一国の経済パフォーマンスの関係というマクロな問題の説明につなげているが、そのために、複数の媒介変数を用意しなければならず、ために関連する諸変数の相互関連や、結果としての経済パフォーマンスに与える腐敗の影響の意義などについて、曖昧な部分が残っている。特に、筆者の枠組で大きな重要性を持っているエイジェントの腐敗に対するプリンシパル（トップ政治エリート）のコントロール能力が、何に由来するのか、国家ないし政治体制のあり方との関連が、体系的に論じられていない。筆者が初期条件として、中国・ロシアの比較において当然考慮されるべき変数、例えば計画経済時代に形成された業界構造・産業立地における差異、すなわち一社独占・一極集中的な経済構造をもつロシアと、地域単位の多社分立・自給型の構造をもつ中国のあり方を十分に考慮に入れていないことも問題として残っている。

第二に、実証面の問題として、一部事実の記述に誤りが見られるほか、事象の意味の判断にも若干性急が見られ、たとえば、中国の改革における国営企業の経営請負制などの政策に関して、それが執行の段階でどのような状況にあったかを十分チェックせず、中央の言明している文言のままの制度であったかのように取り扱っている。また、腐敗取締に関して、中国共産党・政府当局が取った制度的対応で、本論文の内容に関連すると思われるものの一部も、1990年代後半の動きであるせいか、視野から抜けていることも残念である。

しかしながら、これらの欠点は、本論文の成果を大きく損なうものではない。したがって、本審査委員会は、本論文の査読および口述試験の結果により本論文提出者が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。